



「スイス・フランス講演旅行紀 2025」

理化学研究所環境資源科学研究センター・上級研究員

A02 浅子 壮美

sobi.asako@riken.jp

## 1. はじめに

Green Catalysis Lectureship Award を賜り、2025 年 11 月 9 日から 21 日にかけてスイスおよびフランスの大学 6 ヶ所を巡る講演旅行の機会をいただいた。これまでも国際学会等の前後を利用して知人のいる大学へおしかけ講演した経験はあったが、ツアー形式で連続講演をする初めての経験となった。海外出張や海外からの共同研究者の受け入れとの日程調整が重なり、受賞通知をいただいてから出発まで約 1 年を要してしまったことをまずお詫び申し上げたい。旅のルートを組みにあたり、有機ナトリウムの共同研究でご縁のある Bern 大学の Eva Hevia 教授と、学生時代の隣の研究室の博士研究員で日々交流のあった Chimie ParisTech の Jean-François Soulé 教授を必ず訪問すると決め、訪問先とルートを決定した。



最初の目的地は、成田から直行便が運航しているチューリッヒ。Zürich 大学の Ilija Čorić 教授と Cristina Nevado 教授にホストいただいた。Čorić 教授とは、研究をかねてから注目していたことに加え、1st Maruoka Conference で直接言葉を交わす機会があった。Nevado 教授とは、東京大学中村研究室への留学経験をもつ大先輩という共通の縁もあり、いずれも快く迎えてくださった。設備が充実し高く広々とした研究棟に羨望の眼差しを向けつつ、ディスカッションと最初の講演を無事に終えた。Michal Juríček 教授とは、表面合成を専門とする共同研究者をはじめ共通の知人が多く、会話が自然と弾んだ。

都市間の移動は鉄道を利用し、臨機応変に対応できるよう発車直前にアプリで乗車券を購入した。地図から決済までスマートフォン 1 つで簡単に旅をできる時代のありがたさを感じた。スイスという安心感もあってリラックスした気持ちで首都ベルンへ向かった。シンボルのヒグマには会えなかったが、Einstein-Haus を擁する旧市街をゆっくり散策する時間を確保できた。Hevia 教授は有機ナトリウム化合物の研究を先導する無機化学者で、2022 年に奈良で開催された国際学会で初めてお会いし、その後は理研にもお立ち寄りいただいた経緯がある。鉄触媒カップリングの共同研究が始まっ



たこともあり、いつか研究室を訪ねたいと思っていた念願が叶った。Hevia 研究室の学生たちや知人の Dmitry Katayev 教授をはじめとする若手教員と、充実したディスカッションを楽しむことができた。なお、他の 5 大学では「Spirobipyridine Ligands for Molecular Recognition and Selective Catalysis via Noncovalent Interactions」と題した講演を行ったが、Bern 大学では最近のナトリウム化学に関する研究もあわせて発表した。

スイス最後の訪問地はジュネーブ。Genève 大学の Stefan Matile 教授にお世話になった。もともと面識はなかったが、中村研究室からの留学生受け入れの実績があること、そして OIST で開催されたセミナーにて日本通であることを知り、思い切ってメールでご連絡を差し上げた。すぐに温かいお返事をいただいたことに感謝している。Matile 教授からは興味を抱いていた Field Catalysis について丁寧にご説明いただき、また Michel Rickhaus 教授、Jérôme Lacour 教授、Clément Mazet 教授らとの再会、ディスカッション、さらには本格的な日本茶のおもてなしまで堪能した。各地でホストの先生方と夕食をご一緒する機会に恵まれたが、ジュネーブでチーズフォンデュを楽しむ頃には、胃がすっかり欧州サイズに膨らんでいた。適宜食事を抜くことで、体と財布を労った。

好きな都市を言ってくればどこでも調整するよ。Jean-François の言葉に甘え、フランスではジュネーブとパリをうまく繋ぐように、リヨンとディジョンに立ち寄ることとした。ここでちょっとした問題が発生。鉄道予約アプリで行き先を「リヨン」と入力したところ、パリ市内の Gare de Lyon へのチケットを購入してしまっていたことに出発直前になって気がついた。パリへの短期留学時代、滞在先の最寄駅が Gare de Lyon であったため違和感を覚えたことが幸いしたかもしれない。Gare de Lyon-Part-Dieu 行きの正しいチケットを買い直し、日曜日にリヨン入りした。国境を超えて気を一段引き締めながらも、市場や街歩きでリフレッシュできた。Lyon 第一大学では Abderrahmane Amgoune 教授と Jérémy Merad 教授にホストいただいた。スイスがそうであったように、フランスにも独特の研究棟や実験室の様式があるようで、見覚えのある光景に Pierre and Marie Curie University (当時) での生活が懐かしく蘇った。この頃にはだいぶ慣れてきた講演とディスカッションを終え、夕方には慌ただしくディジョンへ向かった。

Bourgogne 大学では Julien Roger 教授にお世話いただいた。同世代で名古屋大学での滞在経験もあるということで、すぐに打ち解けることができた。ここでの講演会に対する反応は特に大きかったように記憶している。重水素化配位子を用いた Ligand KIE 実験の解釈については、理論化学を専門とする Paul Fleurat-Lessard 教授と有意義な議論をさせていただいた。また、“negative data”を通じて基質認識を議論するという発表構成を気に入っていただけたようである。Jean-Cyrille Hierso 教授からも日本愛と幅広い研究についてご紹介いただき、短い時間にもかかわらず印象深い滞在となった。

その日のうちに、3 日連続講演の最終地であるパリへ向かった。Gare de Lyon からタクシーに乗り、レストランで Jean-François と Emmanuel Lacôte 教授と久しぶりの再会を果たした。かつて中村研究室に在籍していたフランス人博士研究員との縁をきっかけに、



フランス系コミュニティと交流する機会が多かった筆者にとって、Jean-François は学内外で行動を共にすることの多い旧友であった。10 年ほど顔を合わせる機会はなかったが、メールでのやり取りは続いていた。Emmanuel とはパリ留学時代に知り合い、その後も来日の折に会っている（もともとリヨンで合流することを期待していたのだがパリに戻っていたようだ）。訪問先の Chimie ParisTech は、Charles Friedel 教授が創設した由緒ある学校で、PSL University を構成する一校である。街中に位置するため手狭ではあるが、改修工事が進められていた。旧知の両名に加え、鉄触媒研究で活躍する Guillaume Lefèvre 教授や質量分析を用いた気相中での反応機構解析を得意とする Sorbonne 大学の Alexandra Tsybizova 教授ともディスカッションの機会をいただいた。急勾配の階段教室で最後の講演を終え、帰路に就いた。

今回の講演旅行を通じて、これまで積み重ねてきた研究成果を広く紹介し、名前を覚えていただく機会を得たことは、若手研究者が国際的なビジビリティをもって活躍していく上で大きな意義があったと考えている。各地での活発なディスカッションや質疑応答は、自らの研究を別視点から見つめ直し、さらに深めるための絶好の契機となった。共同研究のご提案をいただけたことや、この報告書には書き切れなかった先生方との数々の交流も旅の貴重な財産となった。また、多くの受け入れ先で宿泊費や交通費を補助いただいたことにも改めて感謝申し上げたい。最後に、快く迎えてくださったホストの先生方、そして今回の渡航をご支援いただいた国際活動支援担当の先生方、秘書の皆様に心より御礼申し上げます。

